

柵の中で——日系人強制収容所の中の書記空間^{ライティング・スペース}

坪井 秀人

1

この20年ほどの間に近代日本文学研究の分野において〈日本語文学〉というカテゴリーがその存在感を増してきている。〈日本語文学〉という呼称は、多くは、北東アジアや東アジアの周縁地域の人々による文学(例えばアイヌの文学)あるいは南北アメリカにおける日系移民による文学(移民文学など)と通例的な〈日本文学〉とを差別化するために用いられてきた。特にこの20年は、日本が19世紀の末から20世紀前半期にかけて植民地統治を行い、日本語教育を強権的に実施した台湾と朝鮮において、日本語母語非話者が日本語によって行った文学表現を指す領域として〈日本語文学〉という概念は定着してきている。

一方、通例としての〈日本文学〉を日本語使用ということに焦点をあてながら、なおかつ日本語がけって所与のものなどではない、とりわけ近代以降の日本語がつねに翻訳行為を繰り返してつくられたものであることに着目して、それをあえて〈日本語文学〉として脱構築しようとする考え方も成り立つであろう。現在、私は20世紀の日本の近代詩を〈20世紀日本語詩〉という枠組みで歴史的に捉え返す作業を進めているが¹、それも〈日本語文学〉による〈日本文学〉の脱構築の発想と根は同じところにある。

とはいえ、このような〈日本語文学〉の拡大解釈に対しては批判的な立場があり得ることは十分に予測できる。例えば『〈日本人〉になること』*Becoming "Japanese"*²の著者であるレオ・チンはそのような概念の拡大はポスト植民地主義の思考が積み重ねてきたものを矮小化し、〈日本語文学〉の性格を脱政治化してしまうと警告し、その代案として、Francophoneや Sinophoneと同じようにある種の政治的文脈を持った概念領域として〈ジャパノフォン〉(Japanophone)という表現を使うことを提唱している³。

少なくとも私たちは次のように言うことが出来るだろう、〈日本語文学〉の概念によって日本文学の学問的規範や、通例なディシプリンと周縁的なディシプリンとの間にある相互横領的な共犯関係は(もちろん良い意味において)攪乱されることになったのだ、と。今日の日本研究の多くが日本の外部にいる人々によって担われていることから明らかなように、〈地域〉としての日本、〈人〉としての日本人、そして〈言語〉としての日本語がつくる〈三位一体〉はとう

1 坪井秀人「二十世紀日本語詩を思い出す」(連載①~⑩、継続中)、現代詩手帖(思潮社)、第58巻4号-第59巻2号、2015年4月-2016年2月。

2 Leo T. S. Ching, *Becoming "Japanese": Colonial Taiwan and the Politics of Identity Formation*. Berkeley: University of California Press, 2001

3 高麗大学校日本研究センター(ソウル)におけるシンポジウム「世界における日本(語)文学研究の現状と展望」(2015年5月15、16日)での議論の中でのレオ・チンの発言。

に崩壊している。だから、こうも言えるだろう。横領された者は横領する者に対して横領それ自体によって抵抗することが出来るのではないかと。

本稿ではアジア太平洋戦時下において強制収容所^{リロケーション・センター}において日系移民の人々が刊行していた日本語雑誌の一つを取り上げて、その〈文学〉がどのようにこの〈日本語文学〉の中に再配置^{リロケイト}されるのかについて考察するものである。

2

日系移民の人々はすでに19世紀から移民文学の豊かな歴史を持っていた。詩の世界では、ヨネ・ノグチこと野口米次郎[1875-1947]が英語で書かれた彼の最初の詩集『明界と幽界』*Seen and Unseen*⁴を刊行したのは1896年のことだった⁵。私の手許には、1892年から1970年までに発表されたアジア・アメリカンの詩人たちの作品を集めた『静かな火』というアンソロジー⁶があるが、そこでは野口に先だってサダキチ・ハートマンSadakichi Hartman[1867-1944]の作品が巻頭に据えられている⁷。野口の後には、日系移民の詩人、加川文一[1904-1981]が同じく英語による詩集⁸を1930年に刊行していることが注目される。これらの英語による創作と詩集の刊行は日系移民が合州国社会に文化的に適応しようとした試みとして捉えることが出来るであろう。加川は後にトゥーリー・レイク強制収容所で刊行されていた雑誌『鉄柵』のオーガナイザーを務めるとともに同誌における中心的な書き手となる。

加川と同時代の日系移民からは小説やエッセイや詩歌の書き手があらわれて、合州国内で活発に発表されているのだが、これらの創作は間違いなく〈日本語文学〉の中に数えうるものであるだろう。とはいうものの、強制収容所の内部で書かれた文学作品(〈キャンプ文学〉)の性格は多くの点でそれらとはまったく異なるものである。私たちはその〈キャンプ文学〉と合州国における他の〈日本語文学〉との差異について意識を払うことが求められるのである。

まず第一に、〈キャンプ文学〉の作者たちは言うまでもなく彼ら自身の意志にもとづいて移住^{マイグレイト}したのではなかったということがある。彼らは彼らの意志に反して移住^{リロケイト}させられたのである。そして彼らのその過酷な運命はそもそもがアメリカ合州国の社会へと適応しようとした彼らの努力の結果したものだったのだ。というのも、彼らはアメリカ人になろうとしなかったならば、彼らの決定によってより深刻な報いを蒙らなければならなかったからである。彼らはすでにこの国から、移民排斥などのかたちで、受け入れがたい抑圧の歴史を背負っていた。〈アメリカ人になる^{ビカミング・アメリカン}〉ということへの彼らの必要／欲望はすでに苦々しくも裏切られていたのである。しかしながら、合州国の強制収容についての政策は日系移民の自由を制限するばかりでなく、実は彼らの祖国に対する

4

Yone Noguchi, *Seen & Unseen ; or, Monologues of a homeless snail*, New York : Orientalia, 1920.

5

付言すれば、彼の息子で国際的な芸術家・彫刻家として活躍することになるイサム・ノグチ[1904-1988]との父子関係もここではきわめて興味深いものがある。イサムはアジア太平洋戦争勃発後、合州国にとどまり、母と自分を捨てて単身日本に帰ってしまった父親に愛憎半ばする複雑な感情を抱いた。戦時期、ヨネ・ノグチはヨネ・ノグチではなくって野口米次郎として日本国内で少なくとも熱狂的な愛国詩を発表した。一方、イサム・ノグチは自らの意志でアリゾナの日系人強制収容所に入ることになる。このことについては次の文献を参照。Masayo Duus's *The life of Isamu Noguchi : journey without borders*, Princeton, N.J. ; Oxford : Princeton University Press, 2007.

6

Juliana Chang, ed. *Quiet fire : a historical anthology of Asian American poetry, 1892-1970*. New York : Asian American Writers' Workshop, 1996.

7

このほか日系移民の作品としては、早くはフォト・ジャーナリストとして活躍したジュン・フジタ Jun Fujita [1888-1963]、ユタのトパーズ強制収容所に収容されたトヨ・スエモト Toyo Suyemoto [1916-2003]、そして三世で、詩集に『キャンプからの神話』(*Legends from Camp*. Minneapolis : Coffee House Press, 1993)などがある Lawson Fusao Inadaの作品なども収録されている。

8

Bun'ichi Kagawa, *Hidden Flame*, Stanford, CA : Half Moon Press, 1930.

ナショナルスティックな共感を昂進させることにもなった。言い換えればこう
いうことだ、つまり合州国の政治は、彼らの〈^{ビカミング・アメリカン}アメリカ人になる〉ことへの彼ら
の必要／欲望を〈^{ビカミング・ジャパニーズ}日本人である〉ことの再発見へと転位させてしまったのである。

第二に、この〈キャンプ文学〉の書き手たちのポジショナリティがそれぞれ
異なったものであったということがある。私が今回通読した『ハートマウンテ
ン文芸』や『鉄柵』のような雑誌の場合には、短歌・俳句・川柳の幾つかのグルー
プがきわめて活発に活動し、これらの雑誌にも多くの作品が掲載された。もち
ろん詩の作品もそこに見出されないわけではないのだが、その数は多いとは言
えない。それは詩の書き手たちの創作活動がキャンプへの^{インカーゼレクション}「監禁」に至るま
ではもともとそれほど活発ではなかったからだと思われる。予期せぬ監禁の現
実が彼らを熱狂的な創作へと駆り立てていったのである。私たちはこう言うこ
とが出来ただろう、つまり、彼らは作家であつたのではない、彼らはその悲劇
的な体験を通して作家になつたのだと。

第三に、私は彼らが書くことにおいて日本語という言語が果たした役割に注
意を払いたいと思う。例えばハート・マウンテン強制収容所では、『ハートマ
ウンテン文芸』が創刊される前に、『ハート・マウンテン・センチネルズ』*Heart
Mountain Sentinels*という表題の英字新聞が住民たちによって刊行されてい
たのだが、この新聞にも英語で書かれた、いくつかの詩や短歌・俳句・川柳な
ど短詩型の作品を見出すことが出来る。その一つの例としてここに掲げてみた
のが「立退者」(“Evacuee”)という詩の作品である。

この作品は、作者が、^{リロケーション}強制収容／^{エヴァキューション}立ち退きによって鬱屈させられている彼
女の父親との間に抱く葛藤と彼女の揺れ動く感情を描き出している。このテク
ストに見られるように、強制収容の体験は移民〈一世〉である親と〈二世〉である
子どもの世代間の葛藤を惹き起こしていた。そしてこの二つの世代が文学テク
ストを創作するに際して使用言語として何語を選択するかについても異なった
様相を呈していたことも、当然のことであった。特にここでは二世の世代に属
する作者が英語で書いていることは象徴的なことであると思われる。

Evacuee

Father, you have wronged me grievously.

I know not why you punish me.

For sins not done nor reasons known.

You have caused me misery.

But through this all I look on you

As child would look on his parents true.

With tenderness comingling in

The anguishment and bitter tears;
My heart still beats with loyalty
For you are my father
I know no other.

—Kay Masuda⁹

立退者

ケイ・マスダ

お父さん、あなたは私のことひどく誤解しています。
私にはお父さんがなぜ私にお仕置きをするのかわからない。
なんの罪なのか理由もわかりません。
おかげで私は惨めになりました。

でも、このことのすべてを通して、私はお父さんのことを見直しました。
世の子どもが親のことを正しいと思うような見方で。
苦しみや苦い涙と
入り交じった優しさによって
私の心臓はいまも忠誠心で脈打っています。
だってあなたは私のお父さん
ほかにはいない人だから

しかしながら、多くのキャンプの居住者たちにとって、日本語で書くことは感情的な桎梏から自由になれる経験であり、日本語を使うことによって、彼らの過酷な(キャンプの)内部空間を交通可能な均質空間、つまりある種の活性化された書記空間へと変容させるようになったのである。日本語で書くことは彼らにとって、戦時転住局(War Relocation Authority: WRA)の抑圧に対抗する、柵の内側からの防衛線、防護壁の役割を果たしていたのである。

3

1941年12月7日(現地日付)の真珠湾攻撃の後、12万人の日本人が、合州国内の十ヶ所に建設されたりロケーション・センター(Relocation Center)という強制収容所へと移送監禁された。1943年の2月、WRA(戦時転住局)はこれらのキャンプの抑留者たち(17歳以上)に対して、合州国への忠誠心を審査するために〈忠誠心調査〉(Loyalty Questionnaire)という、次のような質問票への回答を命じた。これは「日系合州国市民陳述書」(“Statement of United States

Citizen of Japanese Ancestry”)という調査書の最後の二つの質問(27番と28番)にあたるもので、これに答えた後に回答者は日付と署名を自署して提出となったものであった。ここでは原文とあわせて引用する。

27. Are you willing to serve in the armed forces of the United States on combat duty, wherever ordered?

27: あなたは戦闘命令を受けた場合、どこにおいても合州国軍の任務に進んで服するか?

28. Will you swear unqualified allegiance to the United States of America and faithfully defend the United States from any and all attack by foreign or domestic forces, and forswear any form of allegiance to the Japanese Emperor or any other foreign government, power, or organization?

28: あなたはアメリカ合州国に対して無条件の忠誠を誓い、外国あるいは国内のあらゆる武力攻撃から合州国を忠実に防衛し、日本の天皇や他の外国政府・権力・組織に対するあらゆる形の忠誠を誓って否定するか?

この〈忠誠心調査〉によって選ばれた不忠誠な人々は強制的にキャンプから隔離された。カリフォルニアのトゥーリー・レイク強制収容所はこれらの不忠誠組の人々を受け入れる〈^{セグレゲーション}隔離センター〉として機能した(最大時で一万九千人近くを収容)。そのため多くの数の抑留者たちがトゥーリー・レイクと他のキャンプとの間で交換されなければならなかった。27番と28番の質問のいずれにもノーと答えた日系移民たちは〈ノー・ノー・ボーイ〉という呼び名を刻印された。この〈ノー・ノー・ボーイ〉と呼ばれた一人の若者の生を日系作家のジョン・オカダ John Okada [1923–1971]が小説『ノー・ノー・ボーイ¹⁰』に描いたことはよく知られている。また2015年秋にブロードウェイでも上演された(初演は2012年、サンディエゴ)ミュージカル『忠誠』*Allegiance*も、出演者の一人でもある俳優のジョージ・タケイ自身とその両親たちをモデルとして、日系移民のある家族がハート・マウンテン収容所のキャンプと〈忠誠心調査〉によって翻弄されていく経験を描き出して話題になった。

本稿では、一万人をこえる人々が収容されたハート・マウンテン収容所においてガリ版刷りで印刷発行されていた雑誌『ハートマウンテン文芸』からいくつかの詩歌の作品、とくに短歌作品を取り上げながら、〈キャンプ文学〉の性格とはどのようなものだったのかについて考察を加えていく。だが、その前に『ハートマウンテン文芸』誌の表紙画を描き続けた女性画家エステル・石郷 Estelle Ishigo [1899–1990]のことに少しでも触れておきたい。

10

John Okada, *No-no boy*, Tokyo, Rutland, Vt., C.E.: Tuttle Co., 1957. 日本語訳はジョン・オカダ『ノー・ノー・ボーイ』(中山容訳、東京: 晶文社、1979)。

11

Estelle Ishigo, *Lone Heart Mountain*, Los Angeles, 1972. 日本語版はエステル・石郷 絵・文『ロン・ハート・マウンテン: 日系人強制収容所の日々』(古川暢朗訳、福岡: 石風社、1992)。

12

前掲『ロン・ハート・マウンテン: 日系人強制収容所の日々』、111頁。

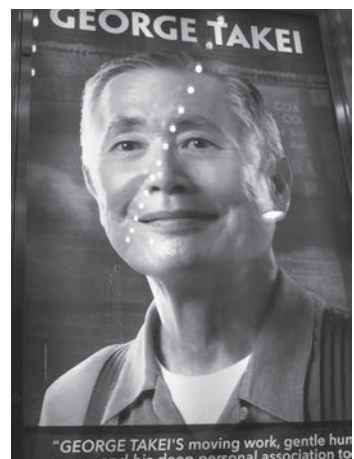


図1: 『忠誠』のジョージ・タケイ、ロングエーカー劇場(ブロードウェイ)



図2：『ハートマウンテン文芸』1944年4月号・表紙(エステル石郷、絵)

彼女はハート・マウンテン収容所の抑留者の中で唯一の白人であった。彼女のドローイングは柵の中で暮らす女性や子どもたちなど、普通の人々がいる普通の風景に投射された収容所内の毎日の生活を描いた。彼女の表現は非常に簡潔で、ハート・マウンテンの人々にあたたかいまなざしを向けているのだが、そのこと自体が実はキャンプの状況に対する有効な批評になり得ていると考えられるのである。ハート・マウンテンの柵の中で描かれた作品を集めた彼女の作品集『ローン・ハート・マウンテン¹¹』は二人の少年による次のような印象的な対話で閉じられている。

男の子が二人丸太に腰掛けている。彼らの前の洗濯皿の中では石炭があかあかと燃えている。

「僕たち、アメリカ人かな」

「ううん、アメリカ人じゃないよ」

「でも、僕たち、この国で生まれたんだよ。アメリカ人じゃなかったら、僕たち何だろう」

「人間さ」

「じゃあ誰がアメリカ人なの？」

「白人がアメリカ人さ」¹²



図3：エステル石郷、ドローイング(『ローン・ハート・マウンテン』111頁)

ここでの少年たちの対話が<^{ビーイング・アメリカンズ}アメリカ人であること>と<^{ビーイング・ヒューマン・ビーイング}人間であること>の二者択一によって制限されていることは興味深い。つまり、この対話は<^{ビーイング・ジャパニーズ}日本人であること>という可能性自体を想定していないのである。さらに言えば、これら無垢なる人々にとっては、<〜になること>自体の行為を意識することが不可能であったとも言いうるだろう。<^{ビカムینگ・アメリカンズ}アメリカ人になること>も<^{ビカムینگ・ジャパニーズ}日本人になること>も彼らには選ぶ対象にはなり得なかったのだ。そして私たちは、この会話が<アメリカ人>、しかも<白人>の一人によって記録され反復されているという事実に注意を向けなければならないだろう。

4

『ハートマウンテン文芸』の創刊号は、上記<忠誠心調査>にもとづいて収容者の中で忠誠者と不忠誠者を選び分けてトゥーリー・レイク・キャンプとの間で交換した後の1944年の1月に刊行されている。そのためもあって、同誌に見られる文学表現のほとんどは、(不忠誠組が集められて隔離された)トゥーリー・

レイクで刊行された『鉄柵』誌上の詩歌作品とは対照的に、政治的にそれほどラディカルなものとは言い難い。この雑誌では、ナショナリズムや国粋主義あるいは反米的姿勢に傾く志向性は微弱であった。もちろん多くの作者たちは戦局の推移や日本と同期化することの出来ない彼ら自身の複雑なアイデンティティ^{ビーイング・ジャパニーズ}に対してきわめて敏感だった。彼らは常にすでに〈日本人であること〉からずり落ちていたからである。

戦はいよいよ進むに老いらくの我はひた待つ迎ひの船を
岡田溪水(1943.12掲載)

隔離所に移され行きし若人ら皆元気よく笑みつつ発ちし
岡田文枝(同上)

エヴァキューエーションの思ひ出のこる此の荷物解けばなつかし我が家の匂ひ
内田静(1944.2)

動乱を離れて住める侘びしさや時の真相知るよしもなく
岩室吉秋(1944.3)

アツ一攻防のさまふと思ふハート嶺の吹雪のなかに立ちすくみつつ
能勢昇(1944.4)

真夜中に覚めてふとしもグアム サイパンのいくさ思へば眼冴えゆく
吉橋東魁(1944.9)

引用した六人の作者のうち、二人の〈岡田〉と内田、能勢、吉橋はいずれも一世の日系移民である。特にこれら一世の抑留者たちにとっては、自らが日本からだけでなく、前線の戦場から遠く離れてあることの距離感の認識は、決定的で取り替え不能な現実であったはずだ。四つ目の短歌の作者である岩室吉秋は『ハートマウンテン文芸』の編集主幹であった。彼自身は日系二世だったが、そのためか同時代の戦局との距離感に対して岩室がとった立場は幾分岡田たちよりは複雑に見える。彼は一世の世代のように戦時状況の中で(戦場から離れてあることに)罪の意識を感じているわけではない。にもかかわらず、戦争の世界に自ら存在することに対して、きわめてアイロニカルに同時代性^{コンテンポラニティ}を感じ取っているのである。そして彼がその歌のテキストにおいて〈戦争〉ではなく〈動乱〉という言葉を採用していることがより重要なこととして思われるのである。

一世と二世との間にあるこの差異は、二世の戦争に対する反応がアンビヴァレントなものであったことに気づかせる。『鉄柵』における活動に見られるように、〈帰米二世〉、すなわち少なくとも一回は日本を訪れた経験があってその後合州国に帰還した二世の人々は戦争に対してラディカルで国粋主義的になりがちで、同時代帝国日本のナショナリズムと自らを連帯させようとする態度をとる場合も見られた。一方、『ハートマウンテン文芸』における二世たちの作品の

いくつかはもう少し相対主義的な思考にもとづいて書かれていることがわかる。『ハートマウンテン文芸』の詩歌作品について特筆すべきは、戦争状況のただ中であって、次のように平和について表現し得た幾つかの作品が見られることである。

来るべき平和の日まで耐へ耐へて侘びし暮らし貫き遂げむ
棚橋宗二(1944.2)

国と国相食むニュース初刷の半を占めて年立たむとす
服部尚之(同上)

戦時^{せんじ}遠流の我等に歌の一つあれ^{こうせいしか}後世史家の心打つ歌
高柳沙水(「彩雲居抄」1944.5)

国と国戦ふ時し咲き盛るポトマック河畔の花信かなしも
小穴みん(1944.5)

この中では服部が二世にあたる。いずれの作品も共通して戦局に対する冷静な視線が顕著である。このような相対主義的な思考を公にすることは当時の日本国内ではほとんど不可能なことであつたらう。政治的批評の次元に達することは難しかったにせよ、キャンプを圍繞する柵こそが、その居住者たちに彼らの思考や感性を自由に表現することを可能にしたとも言えるだろう。高柳は〈心嶺短歌会〉という短歌サークルの主宰者であり『ハートマウンテン文芸』の短歌欄の選者をつとめた。小穴の歌にある《ポトマック河畔の花信》とは、ワシントンDCの街中を流れるポトマック河畔に日米友好の象徴として日本から桜の木が寄贈・植樹され〈全米桜祭り〉(National Cherry Blossom Festival)というお祭りが行われるようになった、その花のたよりのことを指していよう。最初の歌の作者である棚橋の息子は合州国軍の志願兵として前線に赴き、戦場で戦死を遂げた。同誌1944年9月号には棚橋が「征きて還らず」という挽歌連作を書き、〈心嶺短歌会〉のメンバーの一部も追悼の短歌を寄せている。

13

筆者の手許にあるMike Mackey著*Heart Mountain: Life in Wyoming's Concentration Camp*. Powell, Wyo. : Western History Publications, 2000. はキャンプ内での余暇活動に一章を割いているが、『ハートマウンテン文芸』やその関係者については取り上げられていない。そのかわりハート・マウンテン強制収容所での経験について著者がインタビューしたアーサー・ツネイシArthur Tsuneishiによる彼の家族に関する証言の中には、彼の父が著名な俳人で俳句の会を結成し、日本語の図書館も設立し、英語で書かれた古典作品を日本語に翻訳するのに多くの時間を費やした、と紹介されている(同書、p.75)。おそらくこれは常石芝青のことと思われる。

国のため父母を妻をもあとにして華と散りしか中尉棚橋	能勢昇
激戦のさなかに汝をふと見しは夢なりしかと喜びにしが	棚橋宗二
元気よく別れし汝の姿なほ散華の今もありありと見ゆ	同上

〈平和〉ということ言えば、短歌ではなく俳句になるが、次のキャンプ内で創作された作品に対する批評の中に注目すべき言説を見出すことが出来る。堀内和歌子という人の作品を評した常石芝青の「俳句は如何に解するか(続)」(1944.3)の中の一節だ。常石は同誌の「ハート山文芸俳壇」の選者をつとめていた¹³。

●敵国にうくる情やクリスマス(和歌子)

成程女性の句らしい句である。クリスマスの句は従来多くクリスマスの材料になる光景を客観的に描写したものが多く、この句は所謂主観的であつて作者の気持を表はしたものである。我々は不幸にして現在敵国外人としての取扱いを受けて居るが入所以来クリスマス毎に一般米人から種々のプレゼントや慰めの手紙など貰つて感激したのであるが、その境地を少しの無理も誇張もなく「敵国にうくる情や」といつた所がいゝのであつて、センター人の句として特に実感を歌つた価値ある句であると思ふ。由来俳句では露骨なる主観を避けよと言はれて来て居り、「情」といふが如き純主観的な言葉を使用する事も従つて敬遠されて居るが、この句の場合に於てはそれが少しの破綻も来さず成功して居る。然し作者のみならず吾々は余程警戒をしてかゝる言葉の使用に留意せねばならぬ事をつけ添へて置く。

(一九四四・二・一九)

クリスマスという題材の採用にしてからがそもそもそうなのだが、《敵国外人》という自己認識を前提にしながらも、クリスマスを祝うに際しての《一般米人》との感情的な交流(文字通り《情》だ)を率直に詠んだ句として、それを躊躇いも屈折も交えずに称揚しているのである。それを《センター人》として柵の中に住まう人間の《実感》、ひとつのアイデンティティのかたちとして捉えてもいる。1944年の時点でこのようなことが書き得たことは日本国内の情勢を突き合わせれば、これはやはり稀有な風景に映じてしまうのである。

ツールレーキの騒ぎつぶさに知るすべなし千根、博、愛子等如何にか居らむ
高柳沙水(1943.12)

隔離所に移りし友が写したる心こもりし句集届きぬ
杉山漾(1944.3)

実名で名前を挙げて自身の家族に対する気遣いを表現した高柳の作品は、『ハートマウンテン文芸』という雑誌と、そこに掲載された詩歌作品が、別のキャンプ(ここではトゥーリー・レイク)との間を通信するある種のメディアの役割を果たそうとしていた点において興味深い。外界から孤立した空間であるがゆえに、キャンプはそこに住まう人々に書記空間を用意したのだが、書くことは彼らにとって孤立した複数のキャンプの間に想念をつなぐよすがとなっていたことも、これらの歌は物語る。『ハートマウンテン文芸』における文学活動はけっしてラディカルな流れを作らなかったとはいえ、そこにも現状に対する抵抗の気息は常に、ひそかに、はらまれていたのである。

もちろん、キャンプにおいて書かれた多くの詩歌はステレオタイプな水準に限界づけられていた。加川文一は戦前からのロスアンゼルスにおける代表的な日系の詩人で、戦時下にはトゥーリー・レイク強制収容所における文学活動を主導し、『鉄柵』に美しい詩を発表しているが、それらのいくつかは一見して不思議なほど、同時期に日本国内で発表された愛国詩と呼応するような性格を強く持っている。次は『鉄柵』創刊号(1944.3)に発表されたもの。

鉄柵

もろもろの小さき国ほろぶ
国の柱かなたまたこなたに
燃え落つる粒ただなかにあり
われら大いなる戦ひの日
そのあらしより受けとりし
火の粉まじれるかなしみを
地に生くるもののきびしさもて
己れの血とし
己れの肉となさん

風ふく日も
灰のごとき埃りうづまく日も
寒ざむとがれる
かの鉄柵はあれど
そは汝の道のただにひとつなるを
示すのみ
内にちからをたくはへ
かりそめならざる其のちからを
苦難の日の己れとはせよ

柵を出づる日は
たじろかざる汝のうちにあり
その日きたるまで
空虚なることばを吐きて
また己れを吐きすつることなかれ
戦ひは大いにしてかぎりなければ
かぎりなきたたかひのうちに
汝の敵を見失ふことなかれ
汝をも失ふことなかれ

短歌と詩の相違ということはあるとしても、『ハートマウンテン文芸』に掲載された諸作と比べて、格段に言葉の緊張度の高い作品であることが見て取れる。それは〈不忠誠組〉を全米のキャンプから集めて隔離した〈隔離センター〉として機能したトゥーリー・レイク強制収容所の鉄柵の中であって、融和や解放などの〈平和〉のかたちではなく、闘いによって、闘い続けることによって自らの生存を保たなければならなかった人々がいたことを思い知らせる。

《かぎりなきたたかひのうちに／汝の敵を見失ふことなかれ／汝をも失ふことなかれ》というような自恃の意識が、『ハートマウンテン文芸』とは異なる雑誌『鉄柵』の志向の基点をなしていたとも言い得よう。『ハートマウンテン文芸』が日本国内とも合州国の内部とも微妙に異なった書記空間を作り出していたとすれば、加川のこの詩には合州国の中に〈日本〉をもっともきびしい条件のもとで構築しようとしている。

《われら大いなる戦ひの日》等々の措辞には、日本国内において国民詩運動の頂点にあった高村光太郎らの戦争詩の趣とつよく共振するところがある。けれども、加川にとっての《その日》とは高村が固執した〈大いなる日〉、すなわち〈大詔奉戴日〉と名付けられた日米開戦の日、12月8日でないことは、当然のことながら明白である。《その日》はここでは、いつの日にやってくるとも限らない《柵を出づる日》、すなわち〈われら／汝〉という共同的主体が克己・忍耐の闘いのちに勝ち取るべき日以外ではありえない。そしてそのような柵の中に彼らを隔離させたのが、高村らが熱狂した12月8日（合州国時間では12月7日）その日の出来事であったことを思えば、加川の詩を単なる便乗主義的な愛国詩とのみ捉えることは出来なくなる。キャンプの柵の中に作られた書記空間に新たな〈日本語文学〉の可能性を探るのであれば、それはそのような複雑でアイロニカルな状況と思考の痕跡を読み取ることによってはじめてなし得るだろう。

※本稿は2015年11月12日にベルリン自由大学で開催されたワークショップ“Exploring Space in Japanese Literature”において行った報告“Inside the Fence: Writing in the Japanese-American Internment Camps”の発表原稿（英語）を日本語訳したものに加筆したものである。また、2015年6月5日にカリフォルニア大学ロサンゼルス校で開催されたUCLA Trans-Pacific Symposiumで行った報告とも内容的に関連がある。二つの会の報告の際に質問やご教示をいただいた方々に感謝する。

